

氏 名	や ぎ あや こ 八 木 綾 子
-----	---------------------

(論文内容の要旨)

古代インドに関して現存する文献資料は、正統バラモン文献、仏教文献、ジャイナ教文献に大別される。そのうち、仏教とジャイナ教はともに紀元前5世紀ころ東インドのマガダ地方で興隆し、両経典には共通する概念や用語がみられる。そして、仏教はアジアに広がり世界宗教となり現在にいたるが、インドではA.D.13世紀に滅びた。他方、ジャイナ教はインド国内にとどまったが、分派と変遷を経て今日もインドに存続する点は異なる。両経典について、初期仏教の資料であるパーリ仏典と、ジャイナ教白衣派の認める Āyāraṅga 第1篇, Sūyagaḍaṅga 第1篇, Dasaveyāliya, Uttarajjhayaṇa の四つの古層聖典には相互に言及がみられる。用語や平行句の比較を通して、両教の共通点と、各々の独自性を反映すると考えられる相違点を明らかにすることが可能である。本論文では、1章でジャイナ教の業論に関わる諸問題を、2章では、ジャイナ教の解脱道において最高の段階に位置づけられる成就 (siddhi) と成就者 (siddha) に関わる記述を検討する。3章では意味の曖昧になった Ardhmāgadhī apañina をとりあげ、先行研究に基づいてサンスクリット文献、パーリ仏典とジャイナ聖典における関連箇所と用語を比較検討し、特にジャイナ教の独自性を解説することを目的とする。なお、用いたジャイナ聖典の用例は和訳とともに資料として本論に附した。

古代インドの思想では、業 (karman) と輪廻ほどの学派にとっても重要な概念である。ジャイナ教は、輪廻する主体としての靈魂 (jīva) を認め、業を物質ととらえて行為に伴って靈魂に業物質が流入すると考える。また、業を新旧にわけ、新業を防護 (saṃvara) により防ぎ、すでに靈魂に流入した古業を苦行 (tapas) により滅すると主張する。解脱は全業の滅に基づき、全ての行為を停止して達成されるので、肉体の死と同時であるといえる。1章では、先行研究に基づいてジャイナ教の解脱道に関わる用語と問題点を整理して展開過程を跡付ける。そして、ジャイナ教の業論で「[業物質] の流入」を意味する āsrava という語を争点として、釈尊

がジャイナ教徒を改宗させる *Āṅguttaranikāya* II IV.195 を再考する。パーリ仏典もまたジャイナ教の業論を伝えていて、現存の白衣派ジャイナ聖典との対応が指摘されている。さらに、ジャイナ教の術語でもある *āsrava*, *saṃvara*, *nirjarā* という用語にも共通の使用法が見られる。これらのうち、仏典で *āsrava* が流入を表す場合に、流入するものと、流入を引き起こす原因となる事物の双方を表すことは先行研究で明らかにされている。一方、ジャイナ聖典で *āsrava* は一般的に業物質の流入を意味するが、*Āyāraṅga* I.8.8.10の用例は、修行者を苛む危険、困難を表し流入の原因を表すと理解されている。今回、新たに、*Āyāraṅga* I.5.1.3, *Sūyagadaṅga* I.3.2.13の複合語中の *āsrava* の用例は、流入の原因を表す聖典の用例であることが確認できた。いずれの用例が *āsrava* の原義であるかは、さらに検討すべき課題である。

ジャイナ教の業論と解脱道を確認して、*Āṅguttaranikāya* II IV.195を再考する。195 経は、防護したものに新たな流入の原因を認めるか否かについての、仏弟子とジャイナ教徒のヴァッパとの問答で始まり、釈尊の説明を聞いたヴァッパが帰仏して終わる。Gombrich (1994) は、195 経ではパーリ仏典とジャイナ聖典に共通する用語が用いられているが、釈尊の説く滅は現世で到達することが可能であり、そこに両教の主張の違いがみられると指摘している。これは帰仏の動機をなりうる。ただし、滅にいたる手段を述べる「新業を作らず、古業を繰り返し触れて滅する」という一文は、Gombrich (1994) のように仏教の主張にとらずに、これに対応する表現がジャイナ聖典にみられることから、対論者であるジャイナ教徒に合わせて、ジャイナ教の業論の表現を用いたものと理解することが可能である。続いて、釈尊は、心解脱した人は六つの常なる住を過ごすことを説く。これは、五根は正しく機能しながらも、意 (*manas*) は対象に捉われず、平静なもの (*upekhaka*) として過ごすことである。五根と意の制御は汎インド的に説かれるが、仏教は五根と意をまとめて六処に分類し、この分類法を用いて教義を体系化した。ジャイナ教は、心身双方の制御を重視した上で、それを最終的には五根の機能を停止させるという形で実践することを目指すといえる。そして、仏教では重要な語である「平静

(upekḥā)」は動詞 upa-√īkṣ に由来し、この動詞はジャイナ聖典においてもパーリ仏典と同様に、「見過ごす、注意を払わない」を表すことが今回確認されたが、ジャイナ教の術語とはならなかったようである。「平静なもの (upekḥaka)」という語は、仏教において現世中に滅に到達した人の、その後の過ごし方を示す語であるといえよう。

2章では Sūyagaḍaṅga I.1.3.11-12とそれに関わる詩節を取り上げた。この2詩節はある異教のものは、清浄で、悪業を持たないアートマンが愛着と嫌悪のため再び過ちを犯すことを認めると述べる。そして、Badham (1951) が、後代の南インドのアージーヴィカの教義に関連しうる初期資料として言及したことで知られる。アージーヴィカは『パーリ沙門果経』で六師外道の一人として言及され、中世までインドに存在した宗派である。南インドのタミル語文献には、一旦解脱したものが再び輪廻世界に戻ることを表すとみられ、‘cyclic salvation’ と訳される当時のアージーヴィカの解脱観がみられる。この2詩節に対する注釈は、あるものたちがアートマンに三つの段階を認めると、水の比喩とともに言う。比喩に用いられた水に三つの区別がつけられるか否かはさらに検討すべきである。水中の生物を殺さないため、ジャイナ教の出家者は生水を飲むことは禁じられる。加熱処理された水(vikṛta) と塵のない (nīrajas) 水を区別しうるか否かは、出家者の行動規則を定めたカルパストラ等を調査する必要がある。

この2詩節について Cūrṇi という注釈が採る異読は、成就 (siddhi) に位置したものが再び塵とともに降下 (ava-√tṛ) するという。成就 (siddhi) は、サンスクリット文献にも用例は多いが、ジャイナ教の解脱論ではその最終段階を表し、全業を滅して身体を放棄した靈魂が上昇し世界の頂点に位置すると、成就したもの (siddha) といわれる。siddhi, siddha は、パーリ仏典では用例は多くなく術語にもならなかったようであるが、Āyāraṅga I.8.1.3 や Sūyagaḍaṅga I.3.13-16 から、靈魂の存在等と同様にジャイナ教では議論の対象となった語の一つであることが窺える。そして、siddhi を唱える他のものたちのそれに到達する方法に関心を向け、同時にジャイナ教における siddhi の意味とそれに到達する手段が考察され確立し

ていったことが看取される。

3章では、意味の曖昧になった難語とされる *apaḍinna* の意味を考察した。*apaḍinna* は否定辞 *a-* と *paḍinna* に分析されて *paḍinna* に対応する可能性のあるサンスクリット語形である、*pra-kīrṇa*, *pracīrṇa*, *pratīrṇa* のジャイナ古層聖典における用例を検討して、意味上その可能性は低いことをまず確認した。その上で、注釈が述べるように *apaḍinna* は *prati-√jñā* に由来する語とみて、サンスクリット文献、パーリ仏典、ジャイナ聖典における *prati-√jñā* と関連する語を検討した。「知る (*√jñā*)」は多くの前接辞と結びつき、その派生語とともに仏典とジャイナ聖典では多用される。そのうち *prati-√jñā* には、*Āpastamba Dharmasūtra* 2.6.1-2 の用例から、述べる内容が正しいと請合って主張するという意味が窺える。パーリ仏典でも、釈尊が、自らが悟ったことを明言する *Vinaya* I.1.6.27-28 に同様の用例がみられる。そして、引用を示す *iti* や再帰代名詞をとらずに主格 (N) と *prati-√jñā* で「自らが N であると主張する」を意味する構文が、パーリ仏典には特徴的に見られることを指摘できた。

一方、*√jñā* は前接辞の違いによる意味の違いが曖昧な場合もあり、俗語では前接辞 *prati-* と *pari-* が混同されている用例も報告されている。ジャイナ聖典においても、一般的に *prati-√jñā* と「熟知して断つ (*pari-√jñā*)」とは意味上区別されていることをまず確認して、*apaḍinna* の用例を検討する。ジャイナ聖典では、*prati-√jñā* の動詞の用例は少数であり、比丘の施物の授受に関わる行動規定を述べる文脈に現れる (*Āyār* I.8.5.3, *Dasaveyāliya* 12.8, *Kalpasūtra Samācārī* 52)。二例では使役形が用いられ N (主語) は自らの主張を相手に「認めさせる」を意味する。N は自らの意思を相手に主張することが前提とされるので、「主張する」という *prati-√jñā* の意味は看取される。(a) *paḍinnatta* (*Āyār* I.8.5.3) の直後では、*pari-√jñā* に由来する *pariṇṇam* (I.8.5.4) が用いられている。読みについて検討の余地は残るものの、*prati-√jñā* と *pari-√jñā* は意味を区別して用いられるとみなされる。

apaḍinna は、主に *Āyāraṅga* と *Sūyagaḍaṅga* に用例がみられる。前者では、

危難や妨害という語で表される寒暑、虫や周囲の人々の迫害に耐えて、集中して禪定するマハーヴィーラに対する形容として用いられる。外的事物に身体的、精神的に反応することを、広く自らの意思を表すことと捉えると、apaḍinnaは反応しない(自らの意思・主張を表さない)ひとを表すと理解できよう。そして、Āyār I.9.2.11-12で apaḍinna であるものは周囲の人々からの問いかけに答えず、沈黙して禪定する、これが最高のダルマであると述べられる。従って、apaḍinnaは、より積極的に言葉で反応しない(主張しない)ひとを表すことが看取され、動詞 prati-jñā との意味上の繋がりも保たれているといえよう。一方、Sūyagaḍaṅga で apaḍinna は、意味の確立した語として単独で使用されている。この違いは、教団内におけるマハーヴィーラの地位の変化とも関連することであり、今後さらに検討することにした。

一つの単語をとりあげて各章のテーマとし、パーリ仏典とジャイナ聖典における用例を比較検討した。同じ単語であっても、意味の周縁部には相違点も確認でき、両教の独自性を反映していることがみられた。用語の意味の展開について、パーリ仏典を中心とする初期仏教の用例とジャイナ聖典の用例を比較することの重要性は改めて確認できた。両教の教義がインド思想の中でどのような位置にあるのか検証していくことがさらなる課題である。

氏 名	やぎ あやこ 八 木 綾 子
-----	-------------------

(論文審査の結果の要旨)

申請者の八木綾子さんはジャイナ教の初期経典を専門とする研究者である。ジャイナ教は、仏教と同じく紀元前5世紀頃に東インドにて、すでに存在したヴェーダの宗教伝統には属さない出家遊行者たち(シュラマナたち)の中から生まれた宗教である。そのため、ジャイナ教の初期経典と仏教の初期経典(パーリ仏典の古層部)は多くの重要概念や用語を共有し、どちらの研究にももう一方との比較検討が必要不可欠である。しかし、仏教の初期経典の研究に比べ、ジャイナ教の初期経典については世界的に研究者の数が少なく、インドの文献研究全体の中でも研究が遅れている分野である。その理由には、ジャイナ教文献全体に関して、経典への注釈文献も含め膨大な文献があるにもかかわらず、むしろそれゆえにインド外の研究者の間では十分な研究が行われていないこと、またジャイナ教初期経典に用いられるアルダ・マーガディーという言葉の難しさ、パーリ仏典にも共通するがジャイナ教経典中の各経典の成立層を決定することが困難であること等がある。特に言語面で、研究者はアルダ・マーガディーのほかに、パーリ、サンスクリット、ジャイナ教の中世文献で用いられるジャイナ・マハーラーシュトリーなどの言語に熟達していることが求められる。本研究は、そのような困難さをもつジャイナ教初期経典について、いくつかの重要な宗教概念を示す用語や意味不明になってしまっている語に焦点をあて、パーリ仏典、同時代のサンスクリット文献の用法と比較しながら、緻密な研究を行ったものである。

本研究は3つの章から成る。第1章では、まずジャイナ教の解脱道において業を滅する過程に注目し、業論・解脱道に関する先行研究を検討するが、この部分はジャイナ教の基本的な宗教観を示すという点で、この論文全体の導入部ともなっている。つづいて、釈迦がジャイナ教徒のヴァッパを仏教に改宗させる *Āṅguttara-nikāya* II.IV.195 について、従来の解釈を再検討し新しい解釈を提示した上で、この一節

の解説の鍵となる仏教とジャイナ教の業論の差異について、心理面を重視する仏教と身体面を重視するジャイナ教という一般的に認められている両者の差異が業論にも表れていると結論づける。第2章では解脱道の中でも完成した状態を意味する *siddhi*、完成者を示す *siddha* という用語に着目し、これらの用語を用いて仏教・ジャイナ教と同時代に同じ伝統から生まれたアーjeeヴィカ教の解脱観に批判的に言及する *Sūyagaḍaṅga* I.1.3.11–12 を詳しく検討する。さらにジャイナ教の初期経典、パーリ文典、サンスクリット文献におけるこれらの語の用法を検討して、ジャイナ教におけるこれらの用語の重要性と独自性を指摘する。第3章は *apaḍinna* という、意味が不明となりさまざまな議論がなされている語をとりあげる。対応するサンスクリットの語形の可能性をすべて検討し、*a-prati-jñā* の可能性が最も高いと結論付けた後、*apaḍinna* とそれに対応するパーリ、サンスクリット語形だけではなく、動詞 *prati-jñā* 及びその派生語すべてについて、同時代のサンスクリット文献、パーリ仏典、ジャイナ教初期経典での用法を文脈・構文を考慮しながら網羅的に調査し、ジャイナ教初期経典における *prati-jñā* の意味、さらに *apaḍinna* の意味を確定する。

申請者がもっとも得意とするのは、一つの用語に着目し、関連文献におけるその語の意味・用法を網羅的に綿密に検討して、その用語の基本的な意味や、各文献の性格・成立年代による意味の差異を考察するという手法である。この手法をもっとも良く活用し、かつ成功しているのは第3章である。一方、*siddhi/siddha* という用語を扱う第2章では、パーリ仏典では解脱の成就・成就者に対してこの用語が使われず、またサンスクリット文献での用法は成立年代が新しいタントラ文献に主に見られるという点から、用語に着目する手法は十分に機能しているとはいえない。この場合は、*siddhi/siddha* という語にこだわらず、むしろ解脱の成就・成就者という概念を表現する語をすべて比較検討した方が、異なる宗教間の解脱観の差異を明瞭にするためにより有効であったのではないか。ただし、アーjeeヴィカ教に関わる一節を研究対象に選んだ点には、研究の視野を広げていこうとする論者の意欲

がうかがえる。第1章は、前述のように、論文全体の導入部としてジャイナ教の業などの基本概念を最初に解説しており、読み手には親切な構成であるといえる。が、この導入部が長いため、この章の中核である *Āṅguttara-nikāya* II.IV.195 を詳しく検討する節が多少付加的になってしまっている。この点では章の構成、論文全体の構成にもう少し工夫が必要であろう。

このように未熟な点もまだ認められるが、申請者の研究はアルダ・マーガディー、パーリ等の諸言語に関する堅固な能力と緻密な文献学的手法にのっとり、他分野に比べて研究者が少なく遅れ気味であるジャイナ教文献研究において、今後貴重な人材となることが期待される。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認める。2009年2月6日、調査委員4名により論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認められた。